
私の童話

yonaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の童話

【コード】

N3926BA

【作者名】

yonaka

【あらすじ】

就職の面接の帰り道に、穴に落ち地球の中世な感じの異世界にトリップしてしまった。

王道好きの異世界の創造主に、彼の娯楽のため、王道の道を進むことを進められるけど、平凡な私は、平凡人生を歩むつもり。

お世話になっている孤児院で子供たちに地球の童話を話していると、いつの間にもその童話が流行り、出版された。貧乏な孤児院の為だと思いつつ、

異世界なので地球の著作権思いつき無視、ごめんなさい。

王様の目にとまり騎士様が迎えに来た。これは、王道のフラグが上
がってしまった？
平凡な私の王道物語。

プロローグ 1

雲が、 一つもない 真っ青な空

清々しい 空気

太陽は、 サンサン

あー、 素晴らしい洗濯日和。

作者、杉山けいこ。

本当に私って文章力ないと思う。最後のせんたくものをのシーツを木と木の間結ばれた紐に干し、私こと杉山けいこは、空を見上げた。

この空は、私が前に住んでいた所と同じに見えるのに、この空の彼方に私が居た町、日本、世界に繋がる事は無い。

気持ちいいそよ風が私の方より少し下まで伸びかかった黒髪を巻き上げた。ここに来た時は、髪もボブカットだったのに。本当に、月日は勝手に過ぎていく。

この世界でこの先、何日何年過ごしても私が20年間、生まれ育った日本人としての思考や習慣は、きつと変わることは無いだろう。

ゆっくりと日本では、触れることが無かった壮大な大自然に、この中世ですかっていう感じのこっちの生活に慣れてきている私もすごいかも。人間の順応性って素晴らしい。

でも、せめて洗濯機が欲しい、うん、無理なのは分かっている。でも、でも、決して乾燥機とかテレビ、電子レンジ、炊飯器、いやいやその他もろもろの便利な電化製品が欲しいなんてそんな贅沢な事は言いませんから、せめてこの世界のトイレをどうにかしてください。

誰にお願いしているかって、そう、あの日に逢った訳の分からないこの世界の創造者に心の中でお願ひしてみる。

でも、知っているもん。アイツが、この願ひを聞き入れることがない。

あの日、アイツ、この異世界の創造者に逢った日は、私が20年間の間に生きてきて一番、最悪な日だった。

その日は、就職の面接で、ある会社のラジオのナレターの第一面接が終わった帰り道に

面接がうまくいったので自分にご褒美をしようと、バイトの給料日にしか行っただことがなかったケーキ屋さんに行くことにした。

今の気分は、王道のストロベリーショートケーキ。飲み物は、レモンティー、ミントティー、ミルクティー、いやいや、やっぱり王道のストレートの紅茶かな。

私は、いろいろなケーキのことを考えながら人気のない小路を歩いた。

このケーキ屋さん、高年のご夫婦がマスターの定年退職後に自宅の一階をリフォームしてにカフェをしている。

マスターは、設計の仕事していたらしくもちろんこのカフェも自分で設計して、お店の壁には、マスターの描いた設計図が木の額縁に飾られてそれを見るだけで一日を過ごすことができると思う。ケーキは、奥さんの長年の趣味って笑って言うていたけど絶対、趣味をこえている。プロの味。

このカフェは、アットホームな感じでやさしい時間が過ごせて、私の一番のお気に入り場所だ。

この隠れ家のようなケーキさんは、短大に入ったときに、小学1年生の時から親友の加奈子に連れて来てもらってから月に一回くらしい割合で通っている。

本当は、もつと通いたいけど自分の体型と財布の中身を考えるとついつい。食べても太らない加奈子がうらやまし。私って食べる分しっかり肉になっていく感じ。そんなところだけしつかりしないでもいいのに。

このカフェに始めて加奈子と行ったとき、丁度、唯一の家族のおばあちゃんが亡くなって葬式とかいろいろあつて忙しくてそれが終わった後、きゆうに何もしたくなって、寂しさと不安で鬱つだつたときに、かのこに引きずられてこのお店にきた。目の前のショートケーキもどうでもよかつた。

「けいちゃん。このケーキ、おいしいよ」

本当は、食欲があまり無かつたけれど目の前に心配そうに座っている加奈子を見て、一口食べた。

ケーキを一口食べたとき、心が温まる味があると思つた。ケーキを食べながら、おばあちゃんが亡くなった日から一度も泣けなかつたのに涙が出た。

「けいちゃん、がんばつたね。けいちゃんは、一人じゃないよ。みんな、けいちゃんのこと大好きだよ。私は、けいちゃんのお姉ちゃんになるよ」

その後は、加奈子に抱きしめられて思いつきり泣いた。それから、そこに何時間居座つただろう。お店の奥さんが何度もおしぼりと新しい紅茶を持ってきてくれた。

目を真っ赤にして、会計をした加奈子の後ろにときマスターに言われた。

「今日の会計は、いいのでぜひうちのお店をご贖戻にしてくださいね」
てつきり涙が全部出したと思ったけどまた涙が出てきてマスターと奥さんがおろおろしていた。

「また、いつでもここに居るからいらしゃいね」

マスターと奥さんの笑った笑顔のあるは、この場所がいつの間にか私の大切な場所になった。

だから、二人も私の面接のことを気にしていたので上手くいったことを早く報告しよう。

この道は、何度も通ったことがあったので、周りを見ていなかった。

もし、あの時に自分に会えるなら「周りを見て歩きなさい」って、幼稚園生のようにただけど絶対注意するよ。

右足がマンホールより大きい黒い穴に入ってバランスを崩して漫画によく描写されているように落ち方したと思う。

バンジージャンプ並みに落ちていくフリー落下。気持ち悪い。もう、地下に着いてもいいんじゃない。

誰、こんな穴を掘った人。責任とれ。訴える。もう、ダメ、気持ち悪いよ。

意識を手放すのって自分でも分かるんだなと思いつつながら、生まれて始めて意識を手放した。

プロローグ 2

誰かが私の頭をつついていて。微妙に痛い。まだ寝ていたいけど目を開けようかな。

あれ目の前に外国人の美少年が居る。まだ夢のなか。寝よう。二度寝入りは、気持ちいいというしね。

ぼか。

何、何、誰、今、私の頭を、ぼかって殴った。

目を開けたら目の前に、金髪碧眼の美少年が私も見ている、あの、かなり近いすぎるよ。

なに、そのすべすべのお肌、私にたいしての嫌味ですかと意味不明のことをつらつら考えながら、またもや、人生始めて口を開けて人の顔を凝視した。

今日は、人生初めてがオンパレード。

だって、目の前に天使がいる。女の子なら誰だって一度は憧れる美少年だよ。

「そのマヌケ顔、止めてもらえる」

その顔で生意気な口。許せません。神様、どうして。

「だから、私が神様だ。神っていうより、創造者」

私って最近思ってること口に出したりしているの。やっぱり、一人暮らしの人って独り言が多いっていうしね。気をつけないと。

「お前、顔だけじゃなくて頭もまぬけなんだな」

何、この子しれっと、失礼なこと言わなかった。それより、私口固く閉じているよね。私の心の会話聞こえている。まさか、唯漏れ。

「そう、唯漏れ」

いやー、恥ずかしい。この子、エスパー。

「もちろん、創造者だから。ちなみにこの子っていうほど子供じゃない。なんだったら、姿いろいろかえるよ。」

ドラゴンとか、真つ白いヒゲの長いような老人とか美青年とか、美少女、美女、後は、トリップ小説に出てくる神は小動物とかね。私のトリップ小説研究によると主人公が男だと美少女か美女で、女だと美青年か、美少年。そして、今のような会話をする。

だから、私も金髪碧眼の美少年です。どう、王道。すごくない。まさか、自分が王道を体験する日が来るとは感激です。この記念する日を祝して願いを三つかなえてあげよう。

もちろん、願いを増やすとかなないからね。きゃ、これも王道せりふです。感動。さあさあ、王道会話しましょう。で、何を願う」

なんのお願い。いまの状況が分からない。まあ、私も王道大好きだけど。それよりなにこの人。地球を作った創造者。

「やっぱり、気が合うね。これから王道会の同士だから、下僕って呼ぶね。」

私は、地球の創造者じゃない。一回しか説明しないからよく聞いていてね」

下僕って。いつ王道会にはいった。

「はい、アテンション、プリーズ。ここは、下僕がいた地球じゃない別世界。この偉大なる私がつった別世界。

この世界の住民は、ディランドってよんでいて私のことはディランド神ってよんで居る。」

下僕も私のことを呼ぶ名譽を挙げよう。あだ名でディーでいいよ。

それで、それぞれの世界は交わることが無いけど私は、君の世界の物が大好きでよく見に行くんだ。その時に少しの間、時空を開いたら下僕が落ちたと言うことだ。

それでも、すごいタイミング。ちょうど、あの時間、あの場所は、無人という予定だったのにな。

今回の事で、地球の創造主にバレて、もう、そっちの世界に干渉できなくなってしまった。おまえのせいだよ」

この展開、悪いフラグ立っている。

「まあ、いい。これでも私は、心が広いので許さしあげよう。と言う訳だ」

最悪フラグ回避？

「それで、願い事なにか」

別に願い事って、まるでイソップ物語の「金の斧、銀の斧」みたい。それより、さっきの場所に戻して私の前に一生顔を出さないようにお願いしよう。

もちろん、今のことを全てわすれるようになって、これで三つのおねがいだね。うん、それでいい。

「まぬけ、なんなら女神に変身しようか」

まぬけと下僕どっちがマシなんだろう。

「やっぱり、おまえの頭はまぬけだな。なんでなんだろうな。下僕こそ創造者は、素晴らしい世界を作ったのにやっぱり一人位失敗作っているんだな。」

つまり、二度と地球に干渉できなくなったって言ったよね。だから、下僕が、元の世界に戻ることはできないの。わかった」

何言ってるのこの人。人じゃないけど。二度と地球に帰れない。加奈子に会えない。マスターや奥さんに会えない。奥さんのケーキたち。

私って、こいつとずっとここにいないといけないとか。いや、ぜったい、いやです。断固拒否。

もしかして、死んだら元の所に戻れるという、パターンね。

「それないから」

せつかく、人が現実逃避という心のオアシスと言う所にいるのに呼び戻すな。

「ここは、世界の狭間で下僕は仕方ないから私の世界に住んでもらう。感謝しなさい。どう、これから王道の異世界トリップ経験するの。」

やっぱり、え、私って、異世界でチートで、魔物を倒し世界の勇者とか、救世主、神子、いや、巫女とかになるの。

とか、期待されたら困るからいうけど私の世界は、地球と同じで時代は、中世止まり。中世ってトリップの王道でしょう。

魔物とか、魔法とかないから、地球の中世と同じ、だって、地球を真似して中世を造ったから。

私って想像力が無いので真似しました。自己申請です。えらいでし

よう。てへ。」

てへ。てへってする人始めて見ました。人じゃないけど。

「私が、世界を造って500年。なぜか、世界は相変わらず変わらないんだよね。私の住人、私に似て想像力が無いのかも最近おもうんです。

他の王道パターンは、OKだよ。不動第一王道パターンは、やっぱり王子とか王に見初められて、後宮で大奥、異世界版するとか。

あとは、皆大好きな前の世界の知識を使って世界を変えていくサクセスストーリー。」

私的には、このパターンをお願いしますよ。やっぱり、いい加減に時代の変化があってもいいよね。

後は、恋愛要素があって、うん、これで、私の暇つぶしができるよ。恋愛相手は、王家は、さっき言ったからNO。1は、騎士かな、うん、いいね、後は、公爵とかの貴族、隠された王子、妾の子の身分の低い王子とか。

陰謀に巻き込まれた王子、なぜか奴隷にされた王子とか。かなり、いい線だと思わない。それと、村長の息子でもいいし、最強の剣士もいいかも、魔法が無いから魔術師って線消えたね。盗賊の頭っていうのもいいね。

下僕には、王道で騎士と恋愛してね」

誰でもいいので、この人を抹殺してください。盗賊頭って何。結婚は、普通のサラリーマンが一番。最近は、公務員？

「下僕、私が一応神っていうこと忘れてるの。まあ、いいわ。わたしは、心広いので。」

あー、そうそう、下僕の今後異世界トリップの王道の道を歩むためのシナリオね。

やっぱり、王道は、逆ハーね。あと、悪女ができて健気に耐えてヒーローに助けられてハッピーエンドね」

私は、できるだけ地味に生きたい。だいたい、この平凡を描いたような容姿でどこをどうやったら王子を引っ掛けられるの。

まして、逆ハーレムなんて、それこそ無理、自分には、永遠に無縁。20年間生きてきた、彼氏のか、の頭文字も経験したことのないこの私女には、逆ハーレムとかハードルが高いよ。
平凡人生万歳。

「キター。平凡。最近、平凡の主人公多くない。異世界にいつて異様に美形に日本人の童顔受けてモテるとか。あと、かわいい顔の青年が美少女に間違われるとか。

うーんいいね。やっぱり、王道は、顔が平凡なのに黒髪黒目が珍しくて神秘的だとかでモテるパターン。期待させて悪いけど黒髪とか、黒目の人って普通に居るからね。

願い事は、絶世の美人にする。傾国の美女になって、世の男を虜にして王道ドロドロってというのは。もちろん、オマケでそのぼちゃり幼児体型どうにかしてあげるよ」

ぼっちゃりって、幼児体系ってひどくない。加奈子の少し痩せたらかなりかわいさがアップするって言われてたから明日からりんごダイエットしようと思ったのに。

今日食べるケーキって、見逃して。傾国の美女なんてお断り。私も20年慣れ親しんだこの顔気に入っているもん。

「で、願い事何にする。金持ち、若さ、あとは、権力とか。不治不老とか、異様な力とかは、異物で、却下ね。

王道は、好きだけど戦乱とかあんまり好きじゃないしね。なんたつて、私は、心の広いもんね。

どれにする。なんだったら、下僕を一回殺して転生ものにする。そして、前世の記憶をもって生まれた王女とか。いいね。転生もの王道』

さっきから、自分で心が広いつて宣伝してそうゆう人が心が狭いつて、一般にいわれているのに。

「それ、本当」

「本当」

はじめも言葉出したかも。目の前の美少年、何か落ち込んでる感じがする。

「殺されるのは嫌なので転生じゃなくトリップでおねがいします。それと、普通の短大の文学科だったので、専門知識何て無いので世界を変えるとか、サクセスストーリーとか期待しないで、

私のことは、ほっといてください。これ、おねがいじゃなくて、注意です」

私は、絶対に三つのお願いを叶えてもらうためにアイツにお願いした。

プロローグ 3

神にお願いを叶える言われたら、すぐに、お願い事とか思いつくものだろうか。

「デイルランド様、二つ目のお願いは、私がいなくなったら加奈子やマスター、奥さん、バイト先の奥さんとか大家さんが心配すると思うので心配しないようにしてほしいです」

「さっきまで、アイツって言ったのに急に様がついた。

その、お願い、かなり難しいかも。さっきも言ったと思うけど地球に干渉できないし、そっちの創造者に頼んでみるよ。

王道パターンでは、その人が生きてた事実の抹消とかかな？」

抹消。こいつにお願いしていいのか分かんないよ。でも、他に選択しないし。このまま、トリップしちゃおう？

「あのさ、言葉とかどうするの。言葉オプションは、オマケで付けるよ。で、二つ目は、何にする」

やっぱり、自分の人生ってどんな思い出も大切だよな。

それと、本大好きっ子としては、今後、この世界の本が読めないって悲しすぎない。だから、これが二つ目のお願い。

「今までの記憶を全て覚えてたい。それで、記憶力も良くして欲しい。それと、肌をすべすべにして、それと、」

「おい、さっきまで謙虚だったのをお願いごと増えてない。これで、

締めきらせていただきます。

でも、すべすべの肌って、こんなお願いパターンってあるの?」

「だって、いままでずっとアトピーで悩ませていたの。お願いします。」

これから一生、シミもシワも無縁の肌、目指せ永遠の十代肌」

「わかった。なんか、急に疲れた。じゃ、そうゆうことで。ばい、ばい」

ちよつと待って、普通、王道だったら今後のサポートとかあるでしょう。

「下僕が王道の道を歩んだ時、王道会の会長として、夢で逢うようにするよ。これも王道っぽい。じゃあ、またね」

ディランドの体光に覆われて消えた。なぜか、眩しくて目を閉じたら、私の意識もノックアウト。

(不思議な国のアリス

私は、アリスがうらやましい。

だって、私は、元の世界に帰ることができないから。)

不思議な国のアリス 1

私こと、杉山けいこ、年齢20歳と半年、短大の卒業前でナレーターの仕事の面接帰りに異世界におとされて、ここデイランドの一般住人になった。

ここは、デイランドの中で一番の大国で名前がカイライ国ライの東の国境沿いの小さい村。名前は、マイ村。

丁度、隣国のスイ国から国境のマイ山を越えた麓にある村で、最近は、さらに流通が盛んになり村から町になりつつある唯一の孤児院にお世話になっている。

私は、あの日、デイランドをお願いし、気を失った後目を覚ました所は、簡素な木造作りの部屋だった。

まずは、現在地を確認、まだ起きるのがだるくて横になりながら、周りを見渡した。

小さな厚めのガラス窓に黄色いカーテンが掛かっている。

私が横になっているベットは少し固いけど、布団派だから全然平気。シングルベットの横にサイドテーブルがありその上にピッチャーと木のコップと小さな黄色い花が一輪、木で出来たコップにさされていた。

テーブルの横には、これも木の椅子が一脚あった。

雑誌の「カントリーの家」などに紹介されるような感じの部屋。

ドアとその反対側の壁にも大きな黄色いカーテンが掛かっている。クローゼットかな。

私の着ているナイトガウンは、洗濯を何度もしました感じの清潔な木綿のお手製のもの。

この部屋やガウンを見ただけでこの家の人は優しい人だと分かる。

私は、外の景色を見るために体をおこして、ベットの横に座って履物がないか板で出来た床を見ていた。

「あら、起きたのね。よかった、あなたを保護してから二日たったのよ。このまま起きないんじゃない皆で心配していた所だったからよかったわ。

気分はどう。あの国境の山に最近盗賊が出て商隊や、旅人を襲う被害が多いのよ。近いうちに軍が討伐にでる予定だったのに、運が悪かったね。

でも、あなた運がよかったわ。

丁度、商隊のキャラバンがあなたを見つけてくれたこの町に運んできてくれて、この町にある三つの宿は、いっぱいだったからここに運ばれてきたの。

あなたを見つけたときにあなた以外の人は、誰も居なかったそうよ」

目の前の背が高く恰幅のいいおばさんは、椅子に腰掛けた。

木材の小さな椅子が壊れるんじゃないかと思っただけど案外丈夫みたい。

おばさんは、白人で白髪が混じった赤茶色の長い髪はお団子にして結んでいて、目は、夏の木の子の様な緑色で綺麗で、若かったときは、綺麗な人だったと思う。

「右肩に刀傷があったから気をつけてね。女の子のお肌に傷を付けるなんて許せないね。

でも、ヨナおじいさんが傷は、深くないから傷跡も元道理に戻るって言っていたよ。よかったよ。

ヨナおじいさんって言うのはね、変わり者だけど立派なこの町の医者さんだよ。

昔は、王都のキイで開業していたらしいけど5年前にこの町に引退してきたけど医者の居ない町だったからここで今も開業しているんだよ。

本人は、老後の暇つぶしとか言っているけどこの町や、周りの村々

に医者がいるべきだつて弟子を5人も育てている立派な人だよ。この前、お弟子の一人でコナットっていう19歳の青年が王都の医学学校に行ったんだよ。

もう、この町の娘達が泣いて泣いて先週は、大騒ぎだったよ。私も30年若かったら、きつと泣いていたよ。

コナットは、領主の三男で、容姿は、兄弟の中で一番だよ。

そして、とても気さくで優しい好青年で町の娘達がこぞつて病気になるつてコナットの診察を受けようとしたときは、領主さんもできてやつと収まったもんだ。

コナットの微笑みで熱を出した娘も何人もいるつて聞いたよ。

先週は、コナットが町のうわさだったけど今週は、あんたのことで町でうわさだよ」

恐るべしコナット。一生逢うことがありませんように。田舎町、私のことをうわさしてもおもしろ味ないよ。

「あらいやね。自己紹介まだだったね。私の名前は、ヨネリオット。主人は、ミネリオットっていうの。

私のことは、ヨネさん、主人のことは、ミネさんつてよんでね。

ここは、孤児院で主人と二人で経営していて今は、子供たちは、12人いるわ。

いつも、わいわいうるさいけどあなたの家族が迎えに来るまでここでゆっくりすればいいわ。

ちようどあなた位のい子も居るから寂しくないと思うよ。それであなたのお名前はなあに」

私は、自己紹介をしようと思って口を開くと喉がかわいてむせてしまった。

「あらあら、私ったら、お水もあげないでごめんね」

ヨネさんは、テーブルの上のピッチャーからコップに水をついで私に渡した。水は、温かったけど天然水でおいしい。コップを握ったとき右肩に痛みがはしった。せつかく、十代肌を貰ったのに刀傷ができるなんて。ディランド、許さん。だいたい、盗賊ってなに。ヒーローを盗賊の頭っていう設定にするつもりだったのかな。

「杉山けいこです。助けてくださいありがとうございます」

私は、ベットに座っている状態だけど日本人の習慣で頭を45度下げた。

「けいこ 杉山」って紹介するものかな。ヨネさん外国人っぽいし。

「すぎやまけいこでいいのちょっと、変わっているわね。スイ国の名前って変わっているのかしらね」

ヨネさんやミネさんの方が十分変わっている。ヨナおじいさんと、コナットとか、この世界の名前の付け方が気になる。

「いいえ。けいこが名前で。杉山が家名です」

これって、王道台詞。自分で言うことになるなんて。英語の授業以外で言うのって以外に恥ずかしい。

「まあまあ、やっぱり、どこかのご令嬢だと思ったのよ。お肌も綺麗だし、手もまめもなくて柔らかいしね。

歯は、まっしろ。こんな艶のある黒髪って綺麗ね。それにしたって髪をこんなに短く切るなんてひどい。

真っ直ぐな黒髪って珍しいからそれを売るきなのよ。でも、あなた

も売られなくて良かったわ。

この辺の国は、人身売買を厳しく取り締まっているから足がすぐ付くから、しなかったと思う。

それに、貴族とかだと、国の警備隊とかまで関与する可能性があるから警戒したのかもね。

まあ、家族のお迎え来るまでここでゆっくりしてね。

それにしても、同色って、綺麗ね。はじめて、同色持ちにあったよ」

「同色持ちってなんですか」

これって、異端者のフラグ。

「え、知らないの。やっぱり、頭のたんこぶのせい。

名前を覚えているから大丈夫だと思ったんだけど、ヨナおじいさんが記憶を失っているかもっていつてたしね。

名前とか印象強いものは覚えているんだろうね。そうそう、同色持ちってというのは、髪と目の色が同じ人のことをいうんだよ。

滅多にいないんだって。珍しいだけだから。それで、けいこは、何を覚えている。どこかに行く予定だったとか。歳は、家族は、おうちは」

こんないい人に嘘をつくのは嫌だけど他にどう説明をしたらいいかわからない。今まで読み漁ったトリップ小説パターンで、部分的記憶喪失。

「歳は、20歳になりました。ごめんなさい。後の質問は、分かりません」

ヨネさんがいきなり立ったと思ったたら私の頭をヨネさんの豊胸に抱きしめた。

豊胸が凶器だと知った。息が出来ない、ここで死亡する展開。

「まあ、可愛いそうに。きっと、家族が迎えにくるわ。」

20歳っていうのは、どうか分からないけど、15歳くらいだと思
うよ。でも、もうちょっと、成長してもいいと思うんだけどね。」

スイ国ってカイルイ国のように豊かとわ聞かないしね。国土も4分
の1くらいだってね。貴族でも大変だったのね。私の料理ですぐ大き
くなるわ」

デイランドの顔がちらちら見え始めていたら、やっと、離してもら
えた。空気がおいしい。

ヨネさんの目線何気なく私の胸あたりの気もするけどきつと気のせ
いよね。」

いったい、可哀想なのは、年齢詐欺の記憶喪失の頭、それとも、胸？

不思議な国のアリス 2

そのあと、黄色いカーテンの後ろの小部屋に引っ張られて洗面をした。

トイレトペーパーは、葉っぱ、トイレも桶。

この部屋は、病室なのでお手洗いがあるけど、かねては、皆は、外の瓦を使っている。どうしよう。

若草色のワンピースを着て（もちろん、ヨネさんに着せ替え人形にされ）、かぼちゃパンツ、はじめて見た。

はき心地はいいけど、すーすー、体にフィットじゃないのでおちつかないかんじ。

それから、ヨネさんに引っ張られて（引きずられ）、食堂らしき所に着いた。

髪の毛の色がカラフルなちびっこ集団がカラフルなお目々でこっちを見ている。ここが、異世界と実感した。

金、銀、茶、赤、白は、分かるけどこの際、灰色もOK、でも、青、黄色、紫、オレンジ、ピンク、緑、黄色、遺伝子はどうなっているだろう。

「お姉ちゃんの髪の毛とお目々、真っ黒。きれい」

ヨネさんに勧められた席に就いたときに向かい側に座っている5歳くらいのお目々が黄色で髪の毛がピンクの女の子に言われた。

この子、かわいい、もうファンタジー、最高。

「ありがとう。お嬢ちゃんの髪の毛もピンクでかわいいよ」

オレンジの髪で私より15センチ背が高そうな女の子が机の上にあるお皿にスープを入れてくれた。ちなみに私の身長は、150cm。ありがとうって言ったら、ニコって笑ってくれた。この子も美少女。その子の横にスープの鍋を持っている男の子をみたら、やっぱり、格好良かった。背は、180cmあるんじゃないかな。

髪が茶色で目が琥珀。ちよつと、地球人色を発見。そう思いながら、その子を凝視してしまった。

その子と目があつたら、顔を赤くしてそっぽを向かれてしまった。

「その女の子がソニアリックで、男の子がユートリック。

ソニとユートでいいよ。二人共、ここの年長さんで16歳、今度の成人祭の後に王都に行っちゃうのよ。

ソニは、住み込みでパン屋さんに就職で、ユートは、騎士になるのよ。

10年ぶりにこの町から騎士の試験に受かって私もうれしい。さすが、私の子供ね。

二人共いなくなるのは寂しいけど、私たちには、まだ、こんなに子供が居るから幸せよね。ねえ、ミト。

そうそう、私の隣に座っている彼が私のハニーのミトリックよ。

ミトでいいからね」

白髪まじりの水色の髪のもで、薄紫の目、ちよつと痩せぎみで、優しそうな感じの人だ。

肥えた奥さん、痩せた旦那さんカップルって良く見かける。奥さんにエネルギーとられた？

いやいや、反対の人って、引かれ合っつていうしね。ちびのっぽのカップルとか、美女と野獣とか。

「はじめまして、けいこといいいます。怪我の手当てと、看病、数々のご親切有難うございます。

いつになるかわかりませんが、このご恩は、返します。それと、しばらくまた、お世話になります」

私は、立ち上がり45度のお辞儀をした。面接の練習でシゴかれたかいたがあつたかも。

頭を上げると周りは、しーん。小学校の時、しーんとなったら、かならず「誰かが幽霊が通った」っていう奴、必ず居た。

「ミト、言った通りでしょう。この子は、貴族の子だって。しっかりと躑まされているのね。」

頭を打つてもそうゆうのは体が覚えているのよ。さつきだって、お水を飲むのもゆっくりと優雅で絵になっていたもの。

服を着るのも戸惑っていたから、私が手伝ってあげたのよ。きつとメイドが着替えをしてくれたのね。

起きて顔を洗い歯を磨いたし、トイレのあとに手を洗っていたのよ。でね、歩くのもゆっくりで少し急がせたら転んじゃった。

人の話を良く聞いているしね。きつと、家族が迎えに来たら思い出すよ。

けいこを見つけた商隊の人が役場に届けたからすぐくるよ。

まあ、皆がおしゃべりしているから、スープが冷めてしまうわ。ミト、お祈りおねがい」

この会話、つつこみをたくさん入れだくさん？ヨネさん以外誰も話してません。

起きたばかりの時は、ふつう皆、体をゆっくり動かすし。後は、常識の生活習慣。ヨネさんと私の足の軸の長さが違うよ。

「このお恵みをディランド神に感謝します」

ミトさんが言う「感謝します」って、あつちこつちから聞こえた。デイルランドになんかお祈りしません。

デイルランドに、まだ右肩のこと許していない。

ヨネさんは、相変わらずミトさんに話している。いつ、食べているのか不思議だ。

ミトさんは、ただひたすら相打ちをうつっていて、決して自分から話題を提供しない、話さない、首、大丈夫かな。

私の隣に座ったソニが、この孤児院のことや、町の事を食べながら教えてくれた。

スープは、色が怪しい野菜が入っていたけど味は地球と同じだった。私もミトさんを見習って第二のミトさんになった。ソニは、第二のヨネさんにきつとなると思う。

ソニの話によると、この孤児院には、5歳から16歳までの子供たちが今は、12人が生活している。

皆、五年前にスイ国の政権交代のいざこざで内戦があり、

住民が国境に逃げてきたときにいざこざで孤児になった子供たち。

ここは、比較的のどかな平和な村だけど、移民者達と村の人たちの争い始まった。

戦いの原因は、移民者は、異国の不安とそれまでの疲労とかで

村人は、異文化を持ったよそ者を受け入れがたいみたいで、本当に誰も思いつけないくらいに些細な事だったみたい。

一つの村が争いになると、周りの村々にも争いが広まって、国が兵を出しやつと、沈下した。

ここに居る九人の子供たちは、マイ町から、子供の足で北に半日歩いていけばあるトリという村出身だった。

結局、村が焼けてもとも貧しかった村だったが、生き残った村民で、この町に移り住んだ。

ミトさんとヨネさんは、子供が居なくて、ちょうどこの町で2番目

に大きな家を持っていたので親を亡くした17人の子供たちを引き取った。

ミトさんは、昔大きな商人の息子で商売を人に売りこの田舎で土地と家を買って農業をしてくらしていた。

ミトさんの棒のような体で鋤を握って畑を耕している姿が想像できない。

後は、寄付金と野菜を売ったりして生活している。

あと三人の一人は、孤児院の前に捨てられていて、他の二人は、母親が片親で育てられなく預かっている。

二人の母親は、毎月お金と手紙を送ってくるけど、年に一回しか会いにこれないみたい。

普通は、ミトさんやヨネさんのようにできないと思う。二人がどれだけこの子供たちを自分の子供のように愛しているか見ていてわかる。

子供たち皆は、何度も洗濯してよれよれだけど、清潔な服を着ているし、体格いいし、なんとって、皆、とってもいい笑顔で笑っている。

ヨネさんが、立って、手を二回叩くと子供たちの話声が止んだ。

「食事が終わったら小さい子の順番でけいこに自己紹介してね。けいこは、皆の名前を一度に覚えれないからその都度、名前を教えるあげてね」

一番小さい向いに座っていたリタリックちゃん五歳からソニとユートまで12人と握手やハグをした。

うれし涙が出てきた。嬉し涙って簡単にでるものだと知った。

きつと、ミトさんとヨネさんは、知っていたとおもう。私に迎えが

来ないことを。

その後は、小さい子供たちが私と遊ぶために取り合いになったので、「不思議な国のアリス」のお話をにした。

ミトさん、ヨネさんもいつの間にか輪に入って話を聞いている。

途中でユートが水が入ったコップを渡してくれた。話の時、皆の顔の表情がいろいろ変わって私も楽しんだ。

楽しい時間は、すぐ過ぎる。

話が終わったあと、外も暗くなっていてランプが何個か灯されていた。

子供たちがまた、話をねだったけどさすがヨネさんの一言で皆、それぞれの部屋に散らばっていった。

もちろん、私は皆にお礼を言われたり、女子達からは、ほっぺたにキスされた。ヨネさんの豊胸の抱擁も受けた。

また、ディランドがちらちら見えた。ミトさんに抱擁をうけた。ここってスキンシップ多い国なのかな。

「ありがとう。生まれて始めてこんな物語を聞いた。すごくよかったです」

ユートが握手をしてきた。ユートの手が熱かった。思春期の男の子って体温高いのかもしれない。

とっても、いい人たちに助けてもらえた。やっぱり、ディランドに感謝すべきかな。

（人魚姫

好きな人を追いかけて人間世界に住んだとき、やさしい人に会えた？

私は、好きな人に会えなくてもこの人たちに会えてよかった。

この世界で、新しい家族ができました。

恋が実らず、泡になったけど少しでも幸せな思いであつたらいいです。）

人魚姫 1

私、杉山けいこ、いえいえ、けーこは、異世界のカイライ国、マイ町の半人前だけど立派な住民として今日で半年がたった。家名は言わない方がいいと注意されたのと、なぜか、けいこじゃないってけーこと呼ばれている。

曆や、植物、食物、動物など地球と同じなのに人は白人で、髪や目の色がカラフルなんだろう。

すごく気になっているんだけどディランドに聞きたいけどトリップ以来、話していない。

最初のころは、ジャガイモが青だったりニンジンが白で、レタスがピンクだったのは驚いた。

きつと、この世界の人々が地球にいつて、ニンジンがオレンジでピーマンが緑と赤と黄色とオレンジとか、反対に驚くかも。

馬が赤くて牛が黄色なのは、受け入れ難かった。

一番受け入れ無いのがお花。茎も花びらもカラフルでそれは、いいけどくきと葉っぱが、カラフルで花びらが緑って許せない。

このカイライこくは、西側が海に面していて、世界13ヶ国あるなかで一番大きい大国。

季節は四季があり、おだやかに過ごせて世界一豊で住みやすい環境だつて。

私は、いつもの午前中の日課の洗濯物を干している。これがかなりの重労働。

洗濯物の量が半端じゃない。私の生活は、日の出とともに始まり夕暮れとともに終了。

本当に老人のよう、いいえ、農婦のような健康的な生活をしている。もちろん、中世時代のこの世界は、電気が無いので自然とそうなる。

ろうそくは、蜂のワックスで作ったお手製で、ワックスをユートと男の子達のグループが採りに行くときに、

「何事も経験」をモットーに掲げて生きている私なのでいっしょに付いていった。

始めは、アウトドア万歳状態で日本のアニメソングメロディーを歌いながら歩いていった。

子供たちは、私の歌をすつごく気に入っている。子供たちにもいろんな歌を教えてあげている。

やっぱり、この世界は音楽もあまり発達していないみたいだ。

歩いて30分、疲れて休憩しようと言おうか迷っている時に第一の蜂の巣を発見。

ユートに作戦を聞こうとしたら、男の子たち棒を握り蜂の巣に突進。怒った蜂たちが私を目掛けて突進してくる。

ユートに腕を引っ張られて、ひたすら走った。そして、小川にダイビングして、水中に頭を沈めて蜂達がさるのを待った。

息が苦しい。この世界に来て、窒息死を何度しそうになっただろう。蜂たちがさった後、ユートに支えられて川の近く木陰で休んだ。気候も暖かいしユートも暖かいし寒さは無かった。

抱きしめられた時、ユートの体が筋肉質で固かった。私より年下のくせに大人っぽくてドキッとした。ちょっと悔しいかも。

それから、蜂の巣を持ってきた男の子たちと合流した。

皆、もつと、蜂の巣を採集するらしいけど私は、もう気力と体力が無かったので、7歳の男の子と蜂の巣と一緒に孤児院に帰った。

孤児院で女の子たちとろうそくや蜂蜜を作った。こっちの方が楽しかった。

その日の夜は、何個か蜂に刺された所が痒くてなかなか眠れ無かった。

デイルランドのお願い3のおかげで、肌の後ができなかった。デイルランドありがとう。

私の日課は、日の出と共にチビちゃん達を起こして着替えや洗面を手伝い食事の手伝いをして朝食を食べて、洗濯に取りかかる。洗濯の後は、昼食の準備を手伝って昼食を食べてチビちゃん達を送り出す。

ここでは、5歳から15歳まで午後3時間、読み書きや算数を教えてくれる学校がある。

私が読み書きができないことを知ったヨネさんに学校に行くことを勧められたけどさすがにこの年なので断った。

ここに来て二ヶ月が過ぎたころミトさんとヨネさんには、私が異世界から来たことを告げた。

お世話になって親切にしてくる人に嘘を付くのはかなり辛い。ここに来た経由を話したときディランドの話したら、ヨネさんが暴走してしまった。

「そうよ、ケーこは、色持ちでかわいいし、すばらしい才能を持っているしどこか特別だと思っていたのよ。」

そうね、ディランド神の国から来たのね。だから、洗濯の仕方、火のおこし方も知らなかったね。

ディランド神は、私たちにケーこを下さったのね」

やっぱり、異世界とかの発想ができないみたい。ファンタジーとか溢れている日本人のように理解してくれない。

お互いの基本知識の違いで、未だにカルチャーショックを受けてしまう。

私が常識と知っていることが非常識だったりするので、これは、月日が解決するだろう。

「そうだね。でも、周りには、今までのように記憶喪失といっておくよ。」

異国の人でも受け入れない人がいるしね。それにディランド神の国から来たことが分かると神殿に連れて行かれるからね。

これは、三人の秘密ということにしよう」

ミトさんが食事のあいさつと、かねての生活のあいさつ以外の一言より多く喋っているのをはじめて聞いた。

とつても、思慮深い人だったんだ。ヨネさんの影に隠れていたけど一家の大黒柱だったんだ。

言葉が話せるのに読み書きができないという王道パターンを私も経験した。

きつと、想像の乏しいディランドも悪気が無かったと思うことになっている。

始めのころは、午後にソニが教えてくれたけど、私がすぐに文字を覚えて始めは喜んでいたけど、文字をつずれ無くて途中からユートが教えることになった。

私は、日本語を話していて、口からでるときディランド語に変換、そして、耳にはディランド語が日本語になって入ってくる。

口元に意識して見ると日本語の発音の形じゃなかった。ディランドを尊敬してしまった。

文法が日本語でよかったと思う。もしこれが、英語だったら、話もまともにできない子になっているところだった。

日本語の単語を話している私には、スペルが書けない。だから、単語を一つずつこの文字は何と覚えることにした。

でも、文章を書くときに莫大な記憶の中から単語の文字を引き出すのが難しく、文章を書くのをあきらめた。

読むことが必要な時は、一文字一文字日本語に変換して読んでいる。

この世界は、歴史書や司法書はあるのに娯楽本がほとんどないの

で読書をする気がしない。

この世界は、印刷技術が発達していると聞いたときは驚いた。もちろん、紙は、まだ、高級品なので書物は高級品で貴族かお金の
ある商人の人しか所有していない。

あとは、図書館で読むくらいだ。

娯楽は、旅の楽団がお話を少しするくらいで、この町には、毎年春に3日くらい滞在する。春が来るのが待ちどろしい。

孤児院で話した「不思議な国のアリス」が、子供たちによって街中に広まった。

うわさを聞いた旅人、兵士、商人いろんな人がオリジナルの私の話を聞くために孤児院に押しかけた。

困ったミトさんが、二週間に一回読書会をひらいた。席は、50席で前売券はすぐ完売してしまった。

その後のミネさんは、すごかった。

孤児院の食堂とリビングルームの壁を取り外し皆の真ん中に座って話をする。

私の提案でパンやクッキーや飲み物を売っている。

こんな感じで、一ヶ月の孤児院の収入が三倍に増えてヨネさんに泣きながら、ミトさんにお礼をされた。

私の方がお世話になっているし、少し役に立ててよかった。

この世界は、エンターテイメントが無いのですぐに券が完売してしまふ。

人魚姫 2

ここに来て三カ月たったころ、20代後半の空色のかみでピンクの目のパステルカラーのハンサムな男の人が孤児院にきた。彼の名前は、サイラックさんで、王都で出版社をしている社長さんだった。

従業人は5人の小さい会社で、私の話を出版したいそうだと。この世界は、著作権がしっかりしていると聞いたときはおどろいた。法の方が発達が早かったんだ。

私も思いつき著作権を無視しているけど、異世界と言うことで許してほしい。あとの、クレームは、ディランドにしてください。

サイラックさんは、私に對面したときすごく驚いていた。恰好いい人は、どんな顔でいいみたい。

「幼い子供がこんな素晴らしい物語を書くなんてすごいな」

またもや、モンゴル系の主人公が幼く見えるみたい。これは、喜ぶ系、それとも怒る系どっちにするべきなんだろう。

「あー、私は、20歳です」

さすができる男、サイラックさん、フォローがうまい。

「いや、君の作品のように本人も神秘的なんだね。女性に歳の話題を振るなんて失礼でしたね。許してください。レディーけいこ」

その後は、ヨネさんとサイラックさんの間でいろいろ契約をかわした。ビジネスウーマン、ヨネさんがすごかった。

私に入る金額が40%と破格な契約をかわした。

なぜか、部屋にいるミトさんといっしょに部屋の置物状態で会話を聞いていた。

私が文字が書けないことを説明した後、「不思議な国のアリス」を話した。

文字が書けないこと話した時は、驚いた顔をしていたけど何も言わずにサイラックさんが文字を書くことで話がまとまった。

サイラックさんが紙にインクで一つ一つ文字を書いていく。

話の途中でピンクの目をきらきらさせていた時は、小説とかでかねて大人の人がかわいい仕草をしたとき、

ギャップ萌するとかでてくるけど、私もギャップ萌をした。

話を終わった後のサイラックさんは、ビジネスマンだった。「ブラボー」これってイタリア語。

私に抱きつき両方の頬ぺたにキスをした。サイラックさんは密かにイタリア人も。

サイラックさんはお礼をいうと、挨拶もそこそこに外に待機している馬に颯爽と乗って颯爽と去って行った。

一ヶ月後にサイラックさんが「不思議な国のアリス」の本を持って来てくれた。

その本は、日本の本のようにカラープリントじゃないけどインクの匂いがする、若草色の表紙だった。

この色は、私がいつも着ているワンピースの色だ。覚えていたのかな。

その本を受け取り表紙を開いた。

「この本を、私の大好きだった人たちに送ります。

一生、会うことが無いけれど皆、私の思い出の中に生きています。けいこより」

私は、その本を抱きしめて泣いてしまった。この本は、私の過去と

の決別だ。この世界で生きていきます。

この本が出版されて、三週間後にソニとユートと後5人の子供たちの成人祭があった。

祭りというのは、根本的どこも同じらしい。屋台のお店がたくさんあり、私は、チビちゃん達と一緒に見て回った。

本当は、ユートと一緒にダンスを踊ろうと誘われていたけど、ユートは、若い女の子達に囲まれていて近寄れなかった。

騎士になるユートは、かなりモテるらしい。ソニも若い男の達とダンスを楽しんでいた。

出版した本はすぐに完売して、予約が殺到しているけど印刷が間に合わないみたい。

私の手元には、孤児院の二年分の収入がはいった。全額をミトさんと、ヨネさんに渡したら断られてしまった。

私を助けてくれた商隊から、布を買って、女の子達で皆に服を普段着とよそ行きよつの二着作った。それと、下着を作った。靴も皆に新しく揃えた。

プレゼントは、貰うよりあげる方が幸せになれるとむかし聞いたことがある。本当だと思う。

それと、近くの農家からメスの牛を二等と、子豚を4匹買った。

私を助けてくれた商隊の隊長は、クリーム色の髪とヒゲで、熊をイメージさせる人だ。

目の色が黄色でかわいい。名前は、ベアードリック。

ベアーさんは、カイライ国とスイ国の間で商売をしていて、両方の王都にお店をもっている。

私の本の売上に貢献しているらしい。

私と対面したとき、元気になってよかったと言って高い高いをして

くれた。
ヨネさんが、あきれた声で私が20歳よ、というと、もう少しで落とされそうになった。
この世界の人たちは、只えさえ背が高いのに高い高いなんて怖すぎるよ。

孤児院で不思議な国のアリスの話をしたときに子供たちにトランプって何ときかれたので、
自分でトランプを作れば抜きとか、ポーカーとかの遊び方を教えた。

もともと、この世界の紙は厚めなので、この自家製トランプはなかなかいい具合にできた。

ヨネさんにトランプを作るのにかみとペンがいるというとすぐに用意してくれた。

ミトさんがナイフで綺麗に小さくきってくれた。私は、書道を習っていたのでインクのペンは、それほど苦じゃなかった。

このトランプが広がるのも時間がかからなかった。

町の人たちがトランプを欲しがって、孤児院は、いつの間にかトランプ工場になっていた。

ミトさんの説明書つきの手作りトランプは、いつの間にか予約殺到で私たちは、寝る間を惜しんで作っていたら、ベアーさんが助けてくれた。

トランプの特許を取るのを勧められミトさんの名前で取ろうと言ったら、断られて、私の名前で登録した。

登録のなまえは、カイライ国、マイ町出身の黒目黒髪のけーこだった。

トランプの販売は、ベアーさんの商隊でしてくれて、生産は、未だに復興が送れているここから5時間、

北に歩いた所にある村に印刷機を運び工場を作ることになった。

その村は、ソニとユート達の村の隣町だった。二人の村は、もう無いけどその村は復興して少しでも豊になってくれたらいい。ベアーさんは、とてもいい人だ。儲けより人の方を大切にしている。こうゆう人が成功すると思う。

もし、一人身だったらお嫁さんにしてもらうのに残念。

収入は、全てベアーさんの商隊とその村で分けてと言ったらこれは、ビジネスだと怒られた。

孤児院に10%、私に20%で契約書をかわした。

ベアーさんが私の名義で銀行にお金を振り込むことにした。銀行があつたのがびっくり。

ユートとソニの出発前日の最後のユートとの最後の勉強会が終わった後、ユートが珍しく話してきた。

「三年したら、立派な騎士になって帰ってくるから待っていてほしい」

顔が赤いけど、風邪でもひいたかな。

「ここは、私の家だし行くところも無いのでいつまでも待っているよ」

ユートが顔を更に赤くして顔が険しくして、部屋からでていった。どうしたんだろう。

出発の朝、二人のお見送りはチビチちゃん達の泣き声とヨネさんの二人の注意事項のマシニングトークで、かなり時間がかかった。二人は、ベアーさんの商隊といっしょに王都に行く予定だ。ベアーさんが一緒なので安心。

二人のプレゼントをあげたくてヨネさんに相談して、ソニには、丸

イルビーのペンダントで、ユートには馬を買った。

成人女性は親が首飾りをあげるけど孤児院は、余裕がなくてあげられなかったと言うヨネさんに私は、抱きついて

「ヨネさんは、いいお母さん。ミトさんは、いいお父さん」と伝えた。

騎士に入る貴族の子供は皆、馬をもっているといっているので、近くの農場から一頭、牝馬を譲って貰った。

プレゼントを渡すとソニは、さらに大泣きしてユートに抱きつかれた。

二人に気持ちだけでいいと断れたけど、ヨネさんに貰いなさいと言われ、笑顔で受け取ってくれた。

ソニの顔は、泣いているか笑っているか分からないけど。

いってらっしゃい。私の弟と妹。ディランド神の祝福がありますように。

（親指姫

旅の途中で何を感じましたか。

私も旅立ちます。旅の終わりにいいことがありますように。）

人魚姫 2 (後書き)

けーこの恋の相手は誰？まだまだ、キャラクターがでてきます。

親指姫 1

ソニとユートが王都に行って三ヶ月たった。

二人の去った後、皆、寂しそうだったけど最近、また元道りになってきた。

新しい年長さん達が、急にすっかり始めてかわいい。

今は、冬で、クリスマスやお正月が無くて日本が恋しくなった。年の変わり目に、祝いのためにヤギを一頭食べた。

今だに、ヤギの肉は、ハーブをたくさん入れて匂いを消したり、お酒で肉をやわらかく料理をされているけど、

完全に消えることのない独特の肉の臭みに慣れなくほとんど食べる事ができない。

ヤギのチーズも苦手だ。魚が恋しい。ここが内陸部なので貝類は、絶対手に入らない。

いつか、王都の反対側の西の海岸、旅行をしたい。

砂糖は高価なものでハチミツを使いクッキーやパイを作るけれど、マスターの奥さんのケーキが食べたい。

甘味が少なく、洗濯の重労働のおかげで体重が減り腕のたるみが引き締まった。

顔のむくみも取れ、目が二倍の大きさになったみたい。
ダイエットの成功のコツは、原始生活？

この冬は、そこまで寒くなく雪も降らなく過ごしやすい。

生活は、いろんなことで不便なことがあるけど、いろいろ試行錯誤して、工夫して生活している。

洗顔クリームも化粧水もなく、ディランドのおかげで肌が荒れることがなかった。

石鹸は、手作りで洗濯も体や髪を洗うのも一緒のものだ。

泡も立たないし匂いもしないので、春が来たら、薔薇の香りの石鹸

を作るつもり。

花は、色彩が違っけど匂いや種類は同じだった。

赤い薔薇と白い薔薇があつて、不思議な国の話を話した後に気付いて調べたらあつた。

青の薔薇がある。思いつきり、遣伝子を無視している感じ？

髪の毛は、週に一回卵を使ってこつそりトリートメントしている。

歯磨きは、塩と布と糸を使っている。

午後の勉強会は、一人でやっている。

全然はかどらないけど、考え事したり、いろんな物語を思い出したり一人の時間を楽しんでいる。

ユートは、あまり会話をしないけど一緒にいる時間は、ソニと居るときより、心地よい時間だった。

ユートのことを、かなこと違った感じで頼りにしていた。

そろそろ、チビちゃん達が帰って来る時間だから、おやつ準備を手伝いに行こう。

「けーこ。けーこ。大変、早くミトお父さんが、書齋に来てって早く、はやく」

13歳のキミトリックが叫びながら部屋のドアを開けた。もう、学校から帰って来てたんだ。

キミトは、髪が黄緑でオレンジの目のやんちゃ小僧で最初に会ったときは、

私と背が同じ位だったのにいつの間にか顔を見上げない目を見て会話ができない。

キミトがすごく興奮している。

私は、急いでミトさんの書齋に行きドアを軽く叩いた。

「どうぞ」と、いう声を聞いたのでドアを開けて中に入り、目の前に真っ白いマントが見えた。

そのマントが揺れて、マントを来ている人がこつちに振り向いた。頭を上げると、銀の髪に紫の目の男性のエロスを感じさせる、二次世界に出てくる主人公のような綺麗な人だ。

この世界に来て、美男美女に慣れたと思ったけどまだまだだのようだ。

あ、でも、よく考えると、王子が金髪蒼眼で、サブが神官や宰相、それか、騎士が銀髪紫眼が王道だね。

本物の銀髪紫眼が目の前に居る。

「およびでしょうか」

ミトさんが、話しはじめようとしたら、ヨネさんが話はじめた。

「けーこ、すごいよ。この方は、ドレリオット　クムリン様で王様の近衛兵なのよ。」

王様が貴方の本を気に入ってぜひ会いたいということで、クムリン様がお迎えに来たのよ。

どうしましょう、新しいドレスを作らないといけないわね。ミト、どの色が私に似合うかしら。

そうそう、けーこは、何色が似合うかしら。黄色か、ピンク。忙しなくなるわね。

そうそう、クムリン様、出発は、何時になるかしら、一月後、二月後かしら。

どうしましょう、時間が足りないわ」

ヨネさんの暴走が始まり騎士さんビックリして居る。やっぱり、王道の騎士だったんだ。

「マダム、今回は、けーこ様をお連れするように命令されています。国王に早くお連れするように言われているので明日の早朝に出発し

たいと思います」

ヨネさんが珍しく動揺して言葉がどもった。

「あ、あ、あした。そんな急には、支度が出き無いわ。それに、女の子を一人で男の人と旅をさせるなんてそんなことは、できないわ」

私の持っている服は、全部で三着だし、こんな美形の人は、お相手がわんざらいて、平凡な私を襲うなんてないよ。女なら誰でもいいという、変態だったら話は別だけど、曲がりにも近衛兵だしね。

「マダム、私は、近衛兵です。騎士です。私のエスコートでは、不安だというのですか」

騎士様の顔が怖い。凄みの聞いた美声も怖い。美形が怒ると怖いって、本当だったんだ。絶対、平凡顔の人と結婚しよう。

あのヨネさんが、抑え込まれて居る。奇跡的な瞬間に立ち会っている。でも、怖いよ。

これって、ブリーザーが来たって表現すべきかな。

ミトさんをチラと見たら、部屋の隅に移動している。私も仲間に入ってソツチに行っていていいですか。

「い、い、いえ、私は、そうゆうつもりで言った訳じゃなくて」

ヨネさん、またどもった。つぎのどもりは、きつと「う、う、うん」だね。

「では、明日の朝、8時に迎えにまいります。それでは、良い夜を

お過ごしください」

騎士様は、腕を胸に当てて、優雅にお辞儀をして、優雅に退出していった。

ミトさんがいつの間にかヨネさんの横にいた。はやっ。

その後は、荷造りをして（持ち物が数えられるくらいしかなくてもぐに終わった）、

お別れ会をして（皆のお土産リストが殺到。ミトさんの王都ガイドブックっていうのが謎だ）、

明け方にやっと眠った（興奮して寝れなかった。はい、遠足前のオチャマです）。

朝、起きれずぐずぐずしながら準備をして、ヨネさんの注意事項のマシンガントークを聞き流しながら朝食をしつかり食べた。

クムリン様は、さすがに時間道理に迎えにきた。爽やかな朝の風景をバツクに白馬の王子のような登場だった。

実際は、赤馬の騎士だけだね。

ヨネさんが二人乗りを反対して馬車で行くことを勧めた。

ヨネさんと、騎士様のガチンコバトル第二段が始まり、結果は、「馬の方が早く着く」と主張した騎士様が二勝した。

二人共怖いよ、子供たちも怖がつていよ。チラっと、ミトさんを見ると、キミトの後ろに隠れていた。

お別れも騎士様の睨みのお陰で短くすんだ。片道5日かかるので三週間で帰って来る予定だ。

ソニヤユートの時のように涙は泣く皆笑って見送ってくれた。

ただ、最後までヨネさんがクムリン様にくどくどと「けーこの扱い注意事項」を聞かせていた。

きつと、騎士様に負けた腹いせだよ。

その中に私は盗賊に襲われて家族を失い孤児になり、右肩に刀で切られ重傷を負い、

頭も強く殴られて記憶喪失で、かなり常識外れのことをするから、いろいろ教えてほしいとか、

その時の後遺症で文字を忘れて文章が書けない病気になったとか言っている。

とても大げさだ。頭は小さいたんこぶだったし、文字が書けない病気ってあるのかな。それに、そこまで常識外れじゃないよ。

ヨネさん、私をそんなに不孝の少女（女）にしたいの。

「それでは、行ってきます。手紙は誰かに代用して書いておくりますね。」

みんな、元気で土産楽しみにしていい子で待っていてね」

親指姫 2

異世界で始めての旅は、初めの一時間は興奮してはしゃいでいたけど後は、田舎の景色か、大自然だけであきた。

馬上は、風が気持ちよかったけど、時間が立ち寒くなりクムリン様の真っ白なマントに図々しく包まった。

クムリン様の前に座っているから抱き付く感じで後は、顔をカンガルーの子供が袋から顔を出している状態だ。

こんな極上な男と密接して、ドキドキする暇も無いぐらいお尻の痛みしか考えられない。

いつの間にか眠ってしまったようでしたのは、今夜泊まる宿に付いたときだった。

クムリン様が、私があんまりも熟睡していたのでお昼ご飯で起こすのをやめて、そのまま進んだそう。

私も、ぐっすり眠れて頭がすっきり、でも、お尻や、太股と背中が痛い。馬なんて嫌いだ。

日本では、趣味は、旅行ですとか言っていたけど、ここでは、田舎に籠ることですって言うことにするよ。

泊まった宿は、結構、綺麗なところでお風呂もあった。

お風呂は、キッチンの隣の小さい部屋にあり宿の下男が大きな桶にお湯を4杯、部屋にあるタライにいれて、お水を一杯入れた。

ドアの外にクムリン様が待機しているなか、タライに入り、自参の石鹸で頭からつま先まで急いで泡の立たない手ぬぐいで洗った。

お湯がすぐ冷たくなるし、クムリン様を外に待たせているので、気になって落ち着いて入れない。日本のお風呂が恋しい。

この世界は、温泉あるのかな、温泉に入りたい。

孤児に居るときは、外が暖かいときは、川でお風呂をすませた。

男の子たちが、見張って居る間、女の子達で一斉に入った。

5歳のリタリックちゃんに私の胸と、私の隣で体を洗っている12歳のサナちゃんをみていった。

「けーこお姉ちゃんとリタのおっぱい同じ。見てみて、皆、大きくなったらおっぱい大きくなるんだよ。早く、おおきくなるうね」

子供に対して大人げないと言われそうだけど、久しぶりに殺気が沸いた。一応、ささやかな胸のふくらみは、ちゃんとあるよ。

寒くなつてから、台所で沸かしたお湯で体を拭いて、髪の毛もお湯につけて洗つて、週に一度タライで洗つた。

お風呂がすみ、ドアを開け外にでた、待機していたクムリン様が私の持っていたタオルをひつたくり私の髪の毛をゴシゴシふいた。

「部屋の暖炉で髪をきちんとかわかしましよう」

クムリン様は、世話焼きのようだ。下男の人が風呂場に入っていた。

私は、タライのお湯をどうするのか気になつたのでドアから覗いた。私の使つたお湯を壁沿いにある溝に流した。なるほど、この世界の人も考えているんだ。

後ろで、初めは、私の行動を不思議に見ていた、クムリン様が笑い出した。

「失礼。けーこ様は、探求心が大きいんですね」

ふーんだ、気になるものは気になるよ。ずーと、気になるままより、恥を忍んで説明の方がいい。

笑つたクムリン様の顔が綺麗だった。男のエロスを感じさす美形の顔に笑つたら、左頬にえくぼができた。

胸キュンだ。この笑顔で何人の女性の心を射止めたんだろう。

部屋は、暖炉に火が灯っていて部屋はあったかい。
クムリン様は、暖炉の前に椅子を二脚を運んできた。
私は、その一つに座らされ私の後ろに座ったクムリン様に髪にブラシをかけた。

「クムリン様、自分でできます」

「いいんだよ。私は、妹によく頼まれて髪の手入れや結ったりしていたから慣れているから心配しなくていいよ。」

それにしても、艶のある真っ直ぐな髪だね。黒髪というのは、滅多に見る色じゃないから気付かなかったけど、凄く綺麗なんだな。

ところで、旅をする仲間だから他人行儀は、やめよ。家名でなく、ドレリオットの名前で呼んでくれないか。

家族は、ドレリーって呼んでいるからそっちで呼んでくれ。後は、敬語もなしで。私もそうするよ。けーこと、呼んでいい？」

騎士様と名前を呼び捨てる仲になった。週一の卯トリートメントのお陰かな。

ドレリー、恥ずかしいけど相手の希望なのでこの呼び方に慣れないとね。

ドレリーの銀髪の方が綺麗だと思う。三つ編みの髪を本人が結ったのか気になっていたので、疑問解決？

今日は、紺のリボンで昨日は、赤だった。これも自分で買っているのか気になるけど、この質問は心に仕舞おう。

この世界の女性は、髪の毛を長くして上の方でまとめていて、男性は、長くしている人と短くしている人が半々だ。

髪の毛が乾いた後、宿の人に桶をかりて外の井戸で下着と靴下と今日のワンピースを洗って、暖炉の前に椅子を置き洗濯物を干した。

ドレリーは、護衛と言つて私の後についてきて、興味深そうに私のすることを見ていた。貴族様は、庶民のすることが新鮮なのかな。スカート三着、下着も三着、靴下は、四着しかないのでこまめに洗えるときに洗わないといけない。

ブラジャー、そんなものは必要ないの持っていないよ。

こっちは人は、コルセットをつけているけど、ミトさんに、けーこは、必要ないと言われて持っていない。

さすがに、かぼちゃパンツを干すのを少しためらったけど、かぼちゃだし、見てもうれいものじゃないので気にせず干した。

ドレリーとは、部屋も相部屋だし私を子供だと思つていと思う。

ヨネさんの「男から身を守る方法第8乗」に、もし相手が子供と勘違いしていたらそのまま勘違いさせとく。と、あった。

この「男から身を守る方法」は、出発前の注意事項にあつて第23条という半端な数だ。

記憶が良くなつて全部覚えてる自分がうらめしい。あまりにも、くだらなすぎる。

第1条が怯えたふりをして相手が油断したら、股間を蹴つて逃げる、つていうのだよ。

他にふざけたのは、第3条のかわいい顔をして相手に接吻をするつもりで顔を近づけて頭突き、

第19条の思いつ切り泣いて鼻水を垂らしぐちゃぐちゃで汚い顔で相手の興味を逸らす。

男から身を守るといつても女を捨てたくない。

ヨネさんつて、密かに想像力が豊かも。これ、ソニも聞かされたのかな。

でも、いざその時は、そんな多い対策方法なんて思い出さないよ。

食事は、部屋でとつた。

部屋に食事を持ってきた二人の女の子たちがドアを開けたドレリーを見て顔をかわいく赤らめ部屋に入ってきて、

部屋にいる私を見て動揺して食事をテーブルに置いて私を思いつ切り睨んで出て行った。

もちろん、ドレリーには、笑顔で礼をしていた。

食事は、おいしかったけど凄い量で三分の一位しか食べられなくて、行儀が悪いと思ったけれどドレリーにあげた。

得にこの世界に来てから人参の一つを作るのにどれだけ大変か経験して食事を残すことができなくなった。

これから、食事は、三分の一で注文するようにお願いした。そして、小さいんだからもっと大きくなるように食べた方がいいといいと言われた。

これ以上は、横にしか大きくなるよ。胸には、いつてほしい。頃よいときにさっきの女の子たちが皿を取りにきた。女の子が三人増えていた。

もちろん、さつきと同じパターンで今度は、五人に睨まれた。人の悪意は、ささやかなものでも辛い。

王都に着いたらドレリーとは、なるべく関わらないようにしよう。きつと、ドレリーも忙しいしこんな小娘の相手する暇もないだろう。

ドレリーは、風呂に入ってくるのでドアに鍵を閉めて先に眠っているように言われた。

この部屋の鍵をもっていくのでドレリーを待たなくていいみたい。私も、まだ、お尻と腰が痛かったので言葉に甘えて、ベットに横になった。暖炉の炎をしばらく眺めていたら、いつのまにか眠っていた。

朝、支度を完璧に終えた爽やかなドレリーに起こされ、準備をして、宿の食堂で朝食をとった。

もちろん、宿の太ったおばさん以外の若い女の子たちにまた睨まれた。

どこからどう見ても恋人に見えないんだから、睨む必要のないに女って、他の自分より容姿の劣る女がどんな理由でもいい男といっしょにすることが許せない生き物だ。

旅は、次の日もその次の日もその次の日も同じで、ただ日を追うことにお尻と腰が悲鳴を上げている。

後一日で王都に着くので我慢だ。ドレリーは、かなり気さくな穏やかな日とだ。

妹のおかげでお節介な正確になったらしい。

王都で、ドレリーの母親とお兄さんとお兄さんのお嫁さんと妹に会わせると言われたけれど、

ドレリーとなるべく一緒に行動しないと決めているので機会があればと、「THE日本人曖昧」な断りで話を終わらせた。

旅の2日目の馬上で親指姫の話をした。

まだ、誰にも話していない物語だと言うとドレリーが馬を止め、私を下ろしドレリーも降りて片膝について私の右手に両手で掴みキスをした。

「ありがとうございます。このような名誉をお与えになり感謝します」

その後は、ちょっとこそばゆかった。

王都に一番近い街の宿に着いたときに、宿の向かい側に窓ガラス

の大きい婦人洋服店があつた。

こつちの世界に来て始めて洋服店をみたのでうれしくてドレリーが馬を預けているのを待たずに洋服店に入った。

日本に居るときもある程度は、おしゃれとか好きだったし、旅の途中でマントの話がでて、結構いるんな人がコートがわりに来ていると言うことなので自分も欲しくなった。

懐に余裕があつたのでコートを買うつもりだ。あと、かぼちゃパンツもどうにかしたい。

店の中は、中世のドレスショップだった。

黄色いレースの縁がついた、ウール製の深緑のコートがありそれを見たくて左手を伸ばそうとしたら、左脇から、白い手袋を付けた手に叩かれた。

びっくりしてその手の持ち主を見たら、オレンジ髪で、黄緑の気の強そうな女の人私を見下しながら上から見ていた。

「アナタみたいなの、見すばらしい者が来ると頃じゃないの。帰りなさい。どうせ、お金もないんだから汚い手で軽々しく、商品に触り無さんな」

その女の人の両隣に居る女の人たちが笑って私の悪口を言っているけど、シヨックを受けた私は、何を言われているか分からず、そこに立ち呆けていた。

次に意識をしたときは、

「ぼーと突っ立ってないでどきなさい」

女の人に押されたときに体が傾きバランスを崩して右に倒れ、とっさにバランスを戻そうとしたけれどそのまま右の額を机の角に打ち付けてそのまま床に倒れた。

起き上がろうとしたとき額から血が流れ右の目に血が入ってきて起

き上がれなかった。

「けーこ」

ドレリーの声が聞こえたと思ったら、ドレリーが、私の隣に座ってこつちを見ている。ドレリーのあせっている顔を始めてみた。

「けーこ、大丈夫か。医者を、その者すぐ医者を呼んでくれ。それと、街の警備員を。早くしたまえ」

ドレリーが、店員さんらしいおばさんにいい、白いハンカチを胸元のポケットから取り出し私の額に当てた。

私は、その真つ白なハンカチを私の血で汚れるのが嫌で断ろうと思つて体を起こそうとしたけど腕に力が入らない。

それに、少しでも動くとも頭が気持ち悪い。私は、床に寝かされた。

ドレリーは、立ち上がりオレンジ髪の女の人に詰め寄った。

顔が見えないけどきつとドレリーの顔を初め見たその女の人たちは、顔を赤らめたけれどドレリーの顔を見て青ざめていると思う。

「けーこが何をしたというのだ」

女の方は、立ち直るのが早かった。

「この者が場違いな場所に來ていたので注意しただけですわ」

「君に客を注意する権利なんてないじゃないか」

二人の顔が見えないけどドレリーの声がミトさんと公論したときより怖い。

「無礼者。たかが騎士の身分でわたくしに、そんな口を聞いて許されると思っっているのですか。わたくしは、このスクレル子爵の娘ですよ。庶民に正しい教えを説いただけですわ」

「無礼者は、どちらだ。わたしは、クムリン伯爵の弟で、国王の近衛兵、ドレリー　クムリン。王の勅命でこの方を王都に連れていく途中だ。」

この方は、王の来賓。この方を傷つけた報いをおって、スクレル子爵に伝えるから覚悟するように。

その警備員、他の二人の家名と名前と、この事件のことを書き記し上に報告しろ。医者はまだか」

警備員くるの早かったな。ドレリーは、伯爵家の次男だったんだ。この顔で性格で、モテるだろうな。

その後、医者が来て傷を見て、傷は見た目ほど深くなく針を縫わなくてすんだ。でも、出血が多くて二三日、安静にするように言われた。

ドレリーにお姫様抱っこをされて、向かいのホテルのベットに運ばれた。ドレリーが何度も誤ってくるけれど話をする気に慣れなかった。

布団の中に潜ったら、涙が出てきて後は、ただ泣いていた。

ドレリーが心配して声をかけてくるけど、無視して泣いた。旅にでて、ドレリーと居ることではなくさんの女の人に睨まれたり悪意のある言葉を言われたりした。

怪我はドレリーのせいではないのは、頭では分かっているけれど、心がついていけなかった。

この世界に来て一度も泣いていなかった。泣けなかったと思う。孤

児院の皆が暖かく寂しさを感じる暇がなかった。

やっぱり、日本が生まれ育ったところが恋しい。私は、死ぬまで日本人なんだな。

身分差別のある異世界に来たんだと実感した。もう、二度と地球に帰ることができないと身に染みた。

故郷に帰れないことがこんなに辛いとは思わなかった。身が裂ける想いとはこんな感じだったんだ。

私は、泣きつかれてそのまま眠った。次の日は、医者に安静にするように言われていたのでもう一泊した。

ドレリーがいろいろ、気を遣ってくれるけど所詮この人も貴族で仕事で私にやさしくしてくれていると思えて、基本的な会話はするけど、それ以外は、話をしなかった。

孤児院に帰りたい。食事も食欲がでず、悪いと思っただけどほとんどのこした。その日もずっと泣いていた。

次の日は、ドレリーと二人だけの馬車に乗った。中に枕とブランケットが何枚かあり私が横に慣れるようになっていた。

ドレリーがどこからか氷を包んだタオルを持ってきてくれてわたしの目元に乗せてくれた。

氷の値段が高いのを知っているけれど私の心は、固まっただけでお礼もしなかった。

そんな私に対してドレリーは何も言わずやさしくしてくれた。

馬車も車のように乗り心地が悪かった。車のことを想い私は、また泣いた。

「あと2時間ぐらいで王都に着きます。王都では、何をしますか。街の案内は、お任せくださいね」

ドレリーが、気を使って話しかける。

「ソニとユートに逢いたい」

私は、かすれた声でいった。ソニとユートにどうしても会いたかった。

（長靴をはいた猫

私は、自分より大きい存在を目の前にしたとき勇敢な態度がとれるだろうか。

自分の好きな人を助けられる知恵と勇気が欲しい。）

親指姫 3 (後書き)

次は、やっと、王都編。後一人の主人公の相手役がでてきてから登場人物の紹介をまとめたいです。

名前がごちゃごちゃ、ややこしくすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3926ba/>

私の童話

2012年1月14日06時45分発行